願成寺報

平成二十八年三月十日

〒四四〇・〇八一二　豊橋市東新町二十八番地
☎ 〇五三二・五二・九六〇一

■ 春季彼岸・永代経のご案内

今このままを慶ぶことが 仏様への報恩です
そのままの慶びを ご一緒に 見つめ直しましょう

○餅つき・草取り会

恒例になりました。
春き立てのお餅をオヤツにします。
仲間が増えればもっと楽しい！
是非、ご参加下さい。

三月　十七日（木）	午後二時	餅つき・草取り会
十九日（土）	午後一時半	法要のみ
二十日（祝）	午前十時	法要・落語、法話 成田屋紫蝶 師、住職
	正午	お斎（昼食）
	午後一時	法要・落語、法話 成田屋紫蝶 師、住職

別れに始まる倶会の世界

火葬後、最初の法要が初七日法要ですが、こんな話をしています。
私達は迂闊なもので、小さなご恩にはすぐに気がつき、
有難うと云いますが、大きなご恩には気がつく事すらできない。
例えば水道。蛇口を捻れば必ず水が出るので、忘れているが、
断水の時、その有難さを思い知る。
太陽だって、本当に大切なのに感謝の手を合せることは少ない。
元旦に手を合せるが、自分勝手な願いを願うばかりである。
姿がなくなって、やっと気がつける大切な事が沢山ある。
たとえ姿がなくなっても、出合った事実はなくならない。
善くも悪くもその出合いに育てられた私がここにいる。
善悪は小さな私の小さな思い。それを破るように念仏申したい。
そのご縁を大きなご恩と受け止め、頷きなおす時、
方々に囲まれて安心して歩む私の、豊かな人生が開かれる。
真宗では阿弥陀経にある『倶会一処』を大切にしています。
お浄土で仏・菩薩・知友祖先・諸々の縁者と再会し、
いのち融け合わせるように過ごせる事を慶ぶ言葉ですが、
念仏の時、その世界は既に今の私に開かれていたと知らされます。

弥陀ノ浄土ニ帰シヌレバ　スナハチ諸仏ニ帰スルナリ
一心ヲモチテ一佛ヲ　ホムルハ無碍人ヲホムルナリ
《讃阿弥陀仏偈和讃・親鸞聖人》

成田屋紫蝶 師
（なりたや しちょう）
豊橋天狗連の大御所

３年目のご出演です
とても楽しいです

皆様 大入りのほど
宜しくお願い
申し上げます

●正信偈ノート⑰・天親章Ⅱ

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

黄色の勤行本の三十ページから

帰入功徳大宝海　必獲入大会衆数
得至蓮華蔵世界　即証真如法性身
遊煩悩林現神通　入生死薗示応化

功徳大宝海に帰入すれば、必ず大会衆の数に入ることを獲る。蓮華蔵世界に至り得れば、すなわち真如法性の身を証せしむと。煩悩の林に遊びて神通を現じ、生死の薗に入りて応化を示す、といえり。

・功徳大宝海　如来の願心に照らされた功徳溢れる世界　（筆者注）
・帰入　私心を煩悩の濁心と嫌い　如来を思うこと　（筆者注）
・大会衆　如来と共に在り　声を聞き　慶び合う仲間　（筆者注）
・蓮華蔵世界　濁りに染まらない清浄の世界（＝浄土）　（筆者注）
・真如法性身　常住不変の真理を顕す姿　（筆者注）
・煩悩林…　煩悩の暗林の迷いに利他の明るさを現じ　（筆者注）
・生死薗…　生死の苦難に於いて自在に真実の救いを示す　（筆者注）

〈浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〉

・一心帰命の果報

如来の願心（本願）に目覚め、二心なく受止めることで、衆生には三つの果報（利益）が与えられると解説されます。

① 死後、必ず浄土に往生できると定まる
② 浄土に往生した瞬間、弥陀同体の仏の覚りを得る
③ 神通力を得て穢土に還り、自在に衆生を導く

しかし、私心（煩悩の濁心）を捨てることが出来ず、一心帰命出来ない私には、この果報について、絵に描いた餅としか受け止められません。念仏しても往生定まった歓びはなく、亡き人から神通力にて導かれた実感もありません。念仏の・浄土の教えが、私から遠いものとなってしまっています。

筋道が逆なのだと思います。三つの果報は現在の私に既に与えられていて、しかし濁心によって気づかない、だから念仏して清浄の願心に還る・諸仏の導きを聞く必要がある…　と。

・五功徳門（＝五果門）

清浄の願心が浄土を成就し、濁心は穢土を描き出します。そして、穢土だからこそ仏が尊いのです。諸仏は、如来の智慧を得て、浄土へ向かう入口・門へと私達を導きます。私達は、門に特有の功徳に目覚め、浄土への道を諸仏と共に歩むこととなります。

一．近門（礼拝門）
諸仏の礼拝の姿を見て、目指すべき浄土が近いことを感じる
二．大会衆門（讃嘆門）
諸仏の讃嘆の声を聞いて、濁った分別心である我に目覚める
三．宅門（作願門）
諸仏の熱意に共感し、同一に専念して浄土に生れたいと願う
四．屋門（観察門）
諸仏のように智慧を賜り、歩みが歓喜のものとなる
五．薗林遊戯門（廻向門）
歩む姿が、諸仏のように他を導くと識り慶びが溢れる

注（）内に弥陀如来が法蔵菩薩因時に浄土成就の行目として潜った門・五念門を示した。それぞれの門を因として五功徳門が開かれている。

・迷いや苦難の中にこそ

真宗の御教えは「照らされて光る」に収まると思っています。光り方はそれぞれ十色になりますが、それぞれの思い通りの輝きではないようです。逆に、迷いや苦難の闇こそ光を求める機縁であり、見出した光にやっと頷く、その姿が苦難に応じて光るのでしょう。その仄かな輝きこそ私達の人生の意味だと思います。

創作・マガタ国の救い

どうでっしゃろ、可もなく不可もなし… って感じでんなー。
国内は平穏やけど、相変わらず戦争しはりますし…
仏教国かて？ 間違いおへん、王家は先代から帰依しちょります。
王宮の悲劇を治めはったお釈迦様は、儂らのヒーローでんがな。
王宮の悲劇だすか？ あん時は、儂らもえらい目に遭いました。
血気の王子が疑惑激情で母君を幽閉し、父王を獄死させてしもた。
祟りか… 後悔だすか、王子は王にならはったんやけど、全身に腫物が吹出して、痛々しいやら臭いやらで、あきまへんでしたなぁ。
母君が優しく薬を塗らはり、父王も天から許さはったんやけど、腫物はもっと膨み、漂う臭気が国中の作物草木を枯らしてしもた。
医者も手が付けられん、近寄ることすら出来まへんでしたなー。
生き地獄や。来世も地獄で救い無し、と皆で噂しちょりました。
そんな中、釈尊は偉いお方でんな。王様の身体と心を治さはった。
月愛三昧ちゅうんですか、涼しげな優しい光が国中に拡がって、儂もその光の中で、有難いやら… だから恥ずかしいやらで…
光に遇うて、王様の腫物は綺麗に癒えたちゅうことだす。
んで、王様は釈尊に心の救いも求めはった。儂、見ましてん。
ギバ大臣にしがみついて、叱られに行く哀れな子供みたいやった。
話の内容でっしゃろ、判りまへんなぁ知りまへん。… けど多分 …
釈尊も、ご自分の抱える地獄を、お話ししはったんと違うやろか。
そうそう最近、皆も、そんな打ち明け話をようし合うてまんなぁ。
「衆生を導く為ならば、たとえ地獄に落つるとも、なお苦とせず」
釈尊に会って王様、そんなことを云わはったようですわ。
罰の中に師や朋を見出す王様と、罪深いけど赦され合う民が住む、けったいなこの国。どうでっしゃろ、良い国だと思いまっか？

《『涅槃経・王舎城の悲劇』より創作》

仏名としての法名【私見？】

・阿弥陀如来と諸仏と私

無碍光佛ノヒカリニハ　無数の阿弥陀マシマシテ
化佛オノオノコトゴトク　真実信心ヲマモルナリ

《現世利益和讃・親鸞聖人》

阿弥陀如来とは、南無阿弥陀仏の名号となり、常住不変の真実を功徳として輝き、あらゆる世界を照らし出していく働きです。
諸仏とは、すでに念仏して光に目覚め・迷いを脱し・その功徳を慶ぶ阿弥陀の讃嘆者です。また諸仏は、反射光で照らす月のように、私を真実の歩みへと導き・護り・励まします。
本当の私は、迷いを捨てて真実に生きたいと願っている筈です。けれど濁心を捨てられず、私心に惑い、孤独となり、わざわざ地獄を創り出しています。だからこそ仏を必要とし、縁に仏を見出し護られ、仏となり得る存在です。であれば、どんな仏になりたいのか見定めておくことも無意味ではないでしょう。

・人生を懸けての問いと法名の意義

どんな仏になりたいですか
それは仏と云えますか？

こんな問いは不遜なのかも知れません。けれど苦悩の正体を見つめ、生活を仏道に転じ、この世界に残せるものを探す大切な問いだと思います。どんな仏になるのか、そのイメージを法名に表して念仏と共に保ち続けると、人生の方向が定まります。
例えば、釋親鸞の法名は、天親菩薩と曇鸞大師の教説を難中の光と見出された方の名告りであり、人生の柱とされたと思います。
法名は人生の旗印となるもので、亡くなってからでは遅いのです。皆様もこの問いをしっかり受け止めて、なり得る仏の姿を名に表し掲げて、苦難の人生の旗印としてみては如何ですか。

行事予定　～平成二十八年春以降～

月例会の開催日を変更しました、ご注意下さい。

八月　十五日（月）　お盆・歓喜絵（住職）
法要・法話で亡き人を偲びます
軽食・花火あり
午後六時～

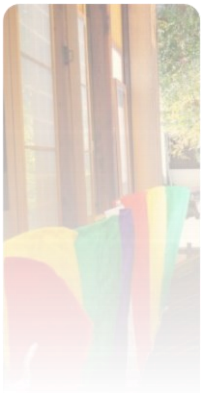
九月　二十二日（木・祝）　秋季彼岸・永代経法会（戸田恵信 師）
お馴染みの先生の情熱的な法話です
お非時（昼食）あり
午前十時～

十一月　三　日（木・祝）　本山納骨堂法会・団体参拝
本山へ貸切バスにて団体参拝します
午前七時ごろ集合

十二月　三　日（土）　報恩講
四　日（日）
御開山聖人御恩に報いる法会です
お非時（昼食）あり
三日　午後一時半から
四日　午前十時から

四月～十二月　毎月一日　月例会
午後二時　～　時間変更の場合があります、
寺までご確認下さい

ただし
八月・九月は、二日に変更
九月以降には、
念珠製作・絵手紙・他も
企画しようと思っています



‡ 後記 ‡

○ 鬼の顔して　福は内　福を思うと　鬼が生れる

小学生の頃、教室で豆撒きをしました。
順番で鬼となり豆を受けた時、痛くて友達の顔が鬼に見えました。
各地で福男の争いが繰り広げられます。
西宮市のえびす神社では、怪我人が出る程の福男レースが行われ、
岡山市の西大寺では二本の宝木を九千人で奪い合ったとか。
福を争う男たちは皆、鬼の顔になっていたと思います。
それまでは何もなく平和だったのに、福を思った瞬間、
私が鬼になったり、周りに鬼を見たりすることとなります。
鬼の棲む処は地獄です。
だからその地獄は、私が創り出したものと云えるでしょう。
けれど地獄は仏に出遇う場所なのです。
ただし地獄だから、仏は鬼の顔をしているかも知れません。

○ 自力は足し算　他力は引き算

自分を信じ、所定の徳行を重ねて仏を目指すのが自力の教えです。
他力はその自信と思いを疑い、破り、捨てることを教えます。
私の思いを破らせる者は鬼であり、破れた処で出遇うのが仏です。
すると仏は鬼の顔をしてすでに其処にいたのかも知れません。
私にとって鬼といえばやはり母です。
自分の思いばかりを中心に私を育てた母は私にとって鬼でした。
母にとっても、反抗ばかりの息子は鬼の子だったと思います。
鬼の親子にはあまり良い想い出がありません。
母は私の文章をどう読むのかと考えます。
念仏において真逆を歩んだ母は、溜息交じりで読むのでしょう。
でも、稚拙で違っていても、あなに向けて考え書いた文章です。
穢土の迷路では右も左も間違いで、ただ迷いの姿があるのみです。
自分を迷子と思うとき、母は傍にいるでしょう。
母を仏と仰ぐとき「迷っていても大丈夫」が開かれます。